

## 4-1-12-2 輸血検査室

### 1. 概要

本院の輸血検査室の業務は、他の検査室と異なり、検査と検査結果配信という検査業務の他に、日赤から購入した医薬品としての輸血製剤を医師からのオーダーに応じて準備・在庫する業務を行っている。そして製剤への放射線照射・自己血を含む血液製剤の管理など、輸血関連の業務を一元的に担当している。輸血検査室業務は24時間体制で行なっており、夜間・休日の日当直帯は1名体制で臨床検査部技師14名が当番制で対応している。診療部門各科での種々の治療における輸血療法は、手術や未熟児貧血・血液疾患での輸血以外に、交換輸血・血漿交換・胎児輸血・顆粒球輸血・リンパ球輸注・extracorporeal membrane oxygenation(ECMO)時の輸血などを含め、多岐にわたり行われ、これらについてもシステムにて管理している。輸血療法委員会(委員長:小児腫瘍科・血液科医長)では「クロスマッチを待てない緊急大量輸血時のマニュアル」を整備し、運用を開始した。毎月開催される委員会では、関連部署、各科からなる委員と問題点を検討し、院内メールで周知徹底に努めている。「安全な輸血」のための検証と対策には、輸血療法委員会を中心に医療安全管理室とも密接に連携し取り組んでいる。医療安全管理室からのヒヤリハットニュースでヒヤリハット事例の改善策情報を配信し、リスクマネジメント研修会では「電子カルテ Q&A:輸血オーダーと製剤管理」を講演し、周知徹底に努めた。

### 2. 輸血関連検査の件数・点数

平成16年度に実施した輸血関連検査の総件数は11,937件(前年度比約5%減少)であった。総点数は794,566点(前年度比約16%減少)であり、これは平成16年4月の診療報酬改定により、輸血関連検査領域の点数が平均8.4%引下げとなった影響と考えられる。

### 3. 血液製剤の使用状況

平成16年度の血液製剤使用量を図に示した。血液製剤の総使用量は赤血球MAPが2,206単位(前年度比8%減)新鮮凍結血漿FFPが2,417単位(前年度比3%減)血小板製剤PCが16,685単位(前年度比21%増)であった。自己血の使用は150単位(前年度比7%減)であった。FFP適正使用を示すFFP使用量比率は、平成16年度は1.00(一般病床300床以上の都内83医療機関平均は0.79)であった。また、準備したが結果として使用されずに廃棄となった製剤数量の抑制策を含め、今後も輸血療法委員会を通じて「血液製剤の適正使用」の推進・啓発を継続していく。

平成16年度 血液製剤使用量

単位

